
近世ヨーロッパの皮革 5. 革工芸品

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

1. はじめ

中世以降、革を型にはめて成形した革製の剣やナイフの鞘、聖餐式用の皿や杯、王冠や司教冠のケース等が製造され、また木製の容器を革張りした愛の小箱や聖遺物箱、印章・封印箱等が製造された。15世紀のルネサンスを経ていっそう工芸性を高めていった。革の装飾が空押しや切り込み技法から、さらに打ち出し加工や打印、彩色の技法が加わり、その後、金箔押しも普及した。金箔装丁は13世紀にモロッコで行われ、エジプトとイランで発展し、15～16世紀にかけてイタリア、スペイン、フランスを経てヨーロッパ全体へと伝わった。

2. 武具

16世紀前半にはミラノで多くの革装飾品が製造されており、豪華な革製の盾や兜が16世紀後半に至るまで製造されていた^{1, 2)}。装飾盾は直径57cmのアーチ形をした丸い木の台の両面に革が張られ、中央部に騎士、周辺部に唐草や蔓が浮き彫りされている。ザルツブルク領主司教の盾は銀箔・金箔押しで赤く彩色された直径58cmの豪華なものであり、1600年頃ベネチアで製造された(図1)²⁾。Cesare Borgia(イタリアの貴族・聖職者)の銘のある剣の鞘(長さ84、巾9cm)は1500年頃のイタリア製で黒い革にブロンズ製のようなみごとな浮き彫りがし



図1 ザルツブルグ領主司教のための盾
(1600年頃 ベネチア)

てあり、革芸術の最高品であると言われて
いる（図2）³⁾。イタリアでは熱を加えた
いわゆる茹革（クィールブイユ cuir bouilli
本誌No.163 P. 2 参照）を用いたブックカ
バー、ナイフや鋏の鞘、教会の杯や皿、聖
体容器等が製造された。ドイツ皮革博物
館に収蔵されている17世紀初めのドイツ製波
状刃の長剣（長さ173cm）の把と狩猟用槍
（長さ206cm）の柄は革で覆われている⁴⁾。

3. 箱類

17世紀初期のイタリア製の、金箔押しや
彩色を施した洋筆筒やアーチ形の蓋の付い
たトランク、宝石箱、測定器ケース等がド



図2 剣の鞘
(1500年頃 イタリア)



図3 ベネディクトボイレンの宝物箱
(1650年頃 ドイツ)

イツ皮革博物館に収蔵されている²⁾。これ
らには人物や動物、植物が表されている。
さらに17世紀のフランスのマリア・メディ
チ王妃の宝石箱、ルイ13世の小箱と宝石箱、
コルベール（ルイ14世の財務大臣）の書籍
箱等や17、8世紀に主にスペインとその植
民地で製作された切り彫り装飾のトランク
類も収蔵されている。箱類はたいてい牛革
製であるが、宝石箱のような小型のものは
山羊革（モロッコ革）である。ベネディク
トボイレン（修道院）の宝物箱（高さ25、
巾30、奥行24cm）は1650年頃の南ドイ
ツ製であり、赤いモロッコ革の張りで、正
面は開き戸で中央と角にロゼット形の金箔
押しを施してある（図3）^{2)、4)}。扉の裏や中
の引出しには風景画が描かれ、象牙細工が
施されている。

イッカク（クジラ目）の角状の長い歯は
らせん状の溝があり、高価な装飾品とされ
ており、その鞘は先端がやや細くなった箱
(281×11.6×10cm) であり、前面と蓋が褐
色のモロッコ革に金装飾を施してある⁴⁾。

4. 装丁本

装丁において革が7世紀頃から使用され
ており、その装飾に金ワニス（金粉と亜麻
仁油あるいはテレピン油、アロエなどの混
合物）を刷毛で塗っていた。15世紀中頃、



図4 アウグスト選帝候のための装丁本
(1581年 ザクセン)

グーテンベルクの活版印刷機の発明および「42行聖書」の出版により、製本装丁の技術が発展した²⁾。熱した真鍮の道具を使用して金箔を革に貼り付ける技術はイスラム圏に起源がある³⁾。金箔押しの装丁は13世紀にモロッコで行われ、その技術は14世紀後半にマムルーク朝（エジプト）やイランで発達した。15世紀初期にイタリアに、15世紀末にスペインにそして16世紀初期にフランスに普及し、さらにヨーロッパ全体に普及した。16世紀後半、金箔押しは装丁に最も用いられた技法であり、当時もっとも好まれた革は赤いモロッコ革（山羊革）であり、それに次いで子牛革が用いられた。枢機卿のためのモロッコ革の装丁本やマリア・テレサのためのモロッコ革の装丁本、ザクセン家のための子牛革の装丁本、アウグスト選帝候のための子牛革の装丁本等があり、それらには草花や組紐の模様と共に家紋が表されている（図4）²⁾。アウグスト選帝候の本の表紙にはザクセン大公国の紋章があり、裏表紙には妃の出身国デンマークの紋章がある。ベネチア紋章の装丁本やパリ市紋章の装丁本にはそれぞれ聖マルコのライオン像のベネチア紋章や帆船のパリ市紋章がある。装丁には、羊皮紙（パー

チメント）や明礬鞣しの豚革も使用された。

5. 革壁

ヨーロッパのルネッサンス期に城や寺院の室内装飾として壁面の壁掛け（タペストリー、タペーテン）に織物と並んで革が数多く使用され、また壁に張り付けて革壁としても使用された。この装飾革はギルトレザー（Gilt leather）あるいはゴルトレダー（Goldleder）、ガダメシ（Guadameci）と呼ばれた。製法は一定の大きさの牛・山羊・羊革に膠を塗り、それに銀箔を張り、さらにコロフォニウムワニス（精製樹脂）で金色の輝きを与えてから木や金属の型で紋様を付けて、最後に彩色する。後に空押しをし、酢と卵白の混合液を塗り、それに金箔を貼り、さらに熱したスタンプを押し付けて浮き彫り模様を鮮明に出している¹⁾。紋様は線や点等の幾何学的なものあるいは花、鳥、人物等が組み合わせてある。図5のオランダ製の壁革（75×59×1cm）は1700年頃の製作であり、銀箔ワニス仕上げ、



図5 壁装飾
(1700年頃 オランダ)

型押し、彩色が施され、棍棒を手にした古代の英雄ヘラクレスを表している²⁾。この革の起源は15世紀スペインのコルドバであり、16世紀になって、イタリアに伝わり、17世紀にヨーロッパ全土に広まった。フランドル地方（ベルギー、オランダ、フランスの北海沿岸部）でも16世紀に製造され、18世紀末にはヨーロッパ各地へ輸出された。さらに東洋貿易の際の贈答品にもされた。

バリャドリド（スペイン）のフェリペ2世の宮殿の装飾（1604年）には、コルドバ製革業者が多く関与した。フランスのカトリーヌ・ド・メディシス王妃が1570年にパリの王宮殿の部屋の装飾にコルドバからガダメシ革を輸入した³⁾。ドイツ皮革博物館には、レリーフや壁飾りが多数収蔵されている。1610年のフェリペ3世のムーア人追放によりスペインの皮革産業は衰退し、金装飾技術はヨーロッパ、特にイタリアに受け継がれた。18世紀中頃、金箔革が衰え、塗金や塗銀の亜麻布、19世紀にはそれらの紙に代わった。

この装飾用の革は祭壇や屏風、椅子、手箱、クッション等にも使用された。祭壇飾りは大きさが100×200cmくらいから50×100cmくらいであり、幼児キリストを抱くマリアや僧侶、花などが表されている。宗教的儀式に司教らが着る大外衣、カズラ（ミサ服）、マニプルス（飾り帯）は絹や亜麻布が用いられたが、18世紀には革も用いられた。イギリスやオランダでは、中国風の工芸品が好まれ、18世紀の屏風には、中国風の人物や情景を表したものがあり、1900年頃のウイーン製の衝立には、植物タンニン鞣しの牛革にスイレンが描かれている⁵⁾。

ヨーロッパで用いられた壁革が建物の改築などで不要となり、江戸時代にオランダとの交易により日本に輸入され、「金唐革」

と称されて、煙草入れや小物入れ、小箱等に加工された。鎖国時代には革や紙を用いた模造品が京都や大阪、姫路で製作されたが、品質は優れており、ヨーロッパのものに相当した。姫路の金唐革と擬革紙は明治時代まで製造された。

6. まとめ

革工芸品の製作は13世紀終り頃より革に切り込みや打ち出し、打印、彩色を施して行われ、16世紀頃には盛んになり、その後、金箔押しの技法も取り入れられた。盾や剣の鞘等は実戦用というよりも儀式用あるいは権威付けのために細工装飾がなされた。宝石箱や書籍箱、トランク等も収納物の保護のためだけでなく、容器の装飾のために紋様のある革を張った。製本装丁にも紋様のある革が用いられた。壁装飾用革は16世紀から18世紀にかけてイタリアやフランス等ヨーロッパ各地で制作された。この革は祭壇や屏風、椅子、手箱、クッション等にも使用された。

文 献

- 1) 日本皮革技術協会：“皮革ハンドブック”，樹芸書房（2005）P. 467.
- 2) サンケイ新聞大阪本社：“ヨーロッパ革工芸美術展”，（1986）No. 44, 65, 88, 174. P. 161.
- 3) The Dictionary of ART, Macmillan Publishers Limited（1996）Vol. 4, P. 346, Vol. 19, P. 1.
- 4) Deutsches Ledermuseum：“Deutsches Ledermuseum angeschlossen Deutsches Schuhmuseum”，Graphische Werkstatt, Offenbach（1956）P. 11, 29, 38.
- 5) Deutsches Ledermuseum / Deutsches Schuhmuseum, “A Race against Transience”，Katalog zur Ausstellung, Offenbach（2012）P. 111.